

# 1967年羽越水害の伝承手法としての「えちごせきかわ大したもん蛇まつり」の成立・継続・効果に関する調査・考察

---

佐藤 翔輔<sup>1</sup>

---

## A Consideration of History and Effect on “The Sekikawa Taishita Monja Matsuri” Festival as a Disaster Memorial Method for the 1967 Uetsu Flood Disaster

Shosuke SATO<sup>1</sup>

### Abstract

“The Sekikawa Taishita Monja Matsuri” festival originated from the 1967 Uetsu Flood disaster has been held in Sekikawa Village, Niigata Prefecture, Japan since August, 1988. The interview survey of the 20 relevant people to the festival and participant survey on the festival were conducted to clarify 1) how it started, 2) how it continued over 30 years and 3) whether it works on the past disaster tradition or not. The results are summarized as follows. 1) The mission of the festival was not to pass down the disaster. Originally, the main motivation was to develop next human resources in the village. 2) They have decided on a big snake motif because the legend story “Ooritouge-densetsu” in the village that people slayed it and a big snake which symbolized God of flood and sediment disaster in Japan have a high affinity. 3) “Dai-jya” is made of bamboo and straw which is broken a few year later. The reason is to inherit the technique and method of making “dai-jya” 4) Only people that want to participate the festival participate it, they welcome anybody from outside the village. 5) “The Sekikawa Taishita Monja Matsuri” functions as a past disaster tradition tool with disaster education in primary and secondary schools.

キーワード：災害伝承，災害メモリアル，1967年羽越水害，人材育成，持続可能性

Key words: disaster tradition, disaster memorial, the 1967 Uetsu Flood disaster, human capacity building, sustainability

---

<sup>1</sup> 東北大学災害科学国際研究所  
International Research Institute of Disaster Science,  
Tohoku University

本報告に対する討議は2021年2月末日まで受け付ける。

## 1. はじめに

これまで大災害を数多く経験している我が国には、被災の経験を伝承する石碑、口碑、地名、津波石、遺構、朗読、歌、絵画、儀礼等の有形・無形の様々な媒体が存在している。これらの存在意義は、「過去の災害の経験や教訓を後世へ伝承する」ことにより「将来発生する災害での人的被害を低減する」ことにあることは疑わない。

1967(昭和42)年、羽越地方では荒川などで外水氾濫が発生し、142名もの死者・行方不明者をもたらした羽越水害が発生した<sup>1)</sup>。被災した地域では、発生から50年経過しているにもかかわらず、この洪水災害に由来する大祭や、犠牲者の供養行事、浸水高の表示板の設置など、様々な方法で災害伝承がなされている。特に死者・行方不明者31名、全壊・流失家屋が371棟と甚大な被害が発生した新潟県関川村では、この羽越水害に由来する「えちごせきかわ大したもん蛇まつり」(以下、「大したもん蛇まつり」)が毎年行われている。「大したもん蛇まつり」は、長さ82.8 m、重さ2tで、竹と藁でできた大蛇のパレード(図1)をメインイベントとする祭である。大蛇の長さである「82.8 m」は、1967年羽越水害が発生した8月28日に由来しており、災害伝承の役割も意図されている。

本報では、この「大したもん蛇まつり」を対象にして、この祭がどのようにしてはじまったのか、どのようにして継続されているのか(継続できているのか)、災害伝承として機能しているのか、を明らかにすることを目的とする。これらの要因



図1 大蛇パレードの様子(2018年、著者撮影)

に迫ることは、今後の効果的で持続的な災害伝承の取り組みを立案・運営する上で有用な知見を得ることができる考える。

## 2. 「大したもん蛇まつり」の概要

表1に「大したもん蛇まつり」の出来事に関する年表(文献2)にもとづいて整理したものを示す。第1回の「大したもん蛇まつり」は、1988年8月に開催されており、羽越水害の直後から始まったのではなく、その発生から21年経過した時点であることに注目されたい。その背景については後述する。祭は、開始から2019年8月執筆時点まで毎年8月に32年間継続して決行(開催)されており、雨天等で中止になったことはない。

第1回目での盛り上がりで全国放送での知名度を受けて、「大したもん蛇まつり」は同年に「日本イベント大賞奨励賞」を受賞した。その後、2001年には「竹とワラでつくられた世界一長い蛇」としてギネスに認定、2004年に第8回ふるさとイベント大賞・イベント部門賞、2006年に新潟日報文化賞(社会活動部門・団体)を受賞と、社会的な関心の高い祭でもある。

祭の入込客数は、集計を開始した1996年度以降、9,000~25,000人で、平均は16,874人であり、村人口の約3倍の人が関与している大きなイベントになっていることが分かる(図2、数値データは村役場提供)。

## 3. 調査方法

本研究は、祭への参与観察、祭関係者や村民に

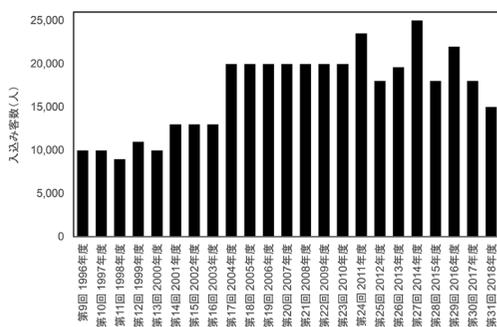


図2 大したもん蛇まつりの入込み客数

表1 「大したもん蛇まつり」に関する年表

年月	主な出来事	祭以外でのイベント ※：村外での実施	受賞等
1967年 8月26～29日	羽越水害(羽越豪雨災害)		
1987年	「せきかわふるさと塾」開設		
1988年 8月	第1回えちごせきかわ大したもん蛇まつり開催		日本イベント大賞奨励賞受賞
1989年 8月	2代目大蛇完成		
1989年10月		ふるさと東京まつり(東京立川市)に参加※	
1991年 8月	3代目大蛇, 初代小大蛇完成(2代目は大石ダムへ展示)		
1991年 8月		丸山大橋開通記念パレード実施	
1995年 8月		新潟ふるさと村でパレード実施※	
1997年 6月		羽越水害30周年記念パレード実施	
1997年 8月	4代目大蛇完成		
1999年 8月	2代目小大蛇完成		
2001年 1月		21世紀巳年元旦記念パレード実施	
2001年 4月	5代目大蛇完成(4代目はど～むへ展示)		
2001年 4月		新潟ビッグスワンでパレード実施※	
2001年 6月			「竹とワラでつくられた世界一長い蛇」としてギネス認定
2002年 6月		ワールドカップの開催を記念し、新潟市古町通りでパレード実施※	
2003年10月		さいたま市民まつり 咲いたまつり2003「さいたま市ドラゴンサミット」に参加※	
2004年 4月			第8回ふるさとイベント大賞祭・イベント部門賞受賞
2004年 8月	6代目大蛇完成(5代目は大石ダムへ展示)		
2006年11月			新潟日報文化賞(社会活動部門・団体)受賞
2007年 5月		羽越水害40年記念 荒川水防演習(神林村)でパレード実施※	
2007年 8月	7代目大蛇完成(6代目はさいたま市へ嫁ぐ)		
2007年 8月	えちごせきかわ大したもん蛇まつりが20回目を迎える		
2008年10月12日		咲いたまつり・日本のまつり(さいたま市)に参加※	
2009年 9月26日		大したもん蛇パレード in トキめき新潟国体※	
2012年 5月26日		ふくしまフェスティバル in 会津に参加※	
2012年 8月 5日		第63回県消防大会でパレード※	
2012年 8月	8代目大蛇完成, 3代目小大蛇完成(7代目はど～むへ展示)		
2013年10月 6日		The MATSURI サミット in 関川村が10月5日～6日開催	
2017年 8月27日	えちごせきかわ大したもん蛇まつりが30回目を迎える 9代目大蛇完成		

対するインタビュー調査、資料調査からなる。まず、第31回として開催された2018年8月24日（安全祈願祭）、25日（花火大会）、26日（大蛇パレード）と第32回として開催された2019年8月25日（大蛇パレード）への参与観察を実施した。インタビュー調査では、2018年10月～2019年2月の期間に、6日間で20名の方を対象に実施した。インタビューは、関川村役場職員をインフォーマントとし、性別・年齢・立場に広がりをもつように選定・紹介していただいた。表2には、そのインタビュー対象者の調査年月日、性別、年代（調査時点）、羽越水害の経験の有無、備考を示した。インタビュー調査では、1）羽越水害の記憶（直接的な体験、または聞いて・知っていること）、2）大したもん蛇まつりとの関わりや参加の程度・感想、3）その他祭について知っていること、の3点を伺った。資料調査では、主に関川村役場を2018年6月～2018年12月の間に5回訪問した。

## 4. 結果・考察

### 4.1 どのようにしてはじまったのか

以下は、祭の第1回がどのような過程を経て、

立案・実行されたかについて得られた情報をまとめたものである。この過程をもとに、祭がどのようにしてはじまったのかについて考察を行う。なお、以後、特に断りのないかぎり、かぎかっこと「○氏」の表記は、インタビュー対象者の発言内容である。

#### (1) 祭の成り立ち

「大したもん蛇まつり」が始まったのは、前年の「せきかわふるさと塾」の開設が直接的な背景となっている。「せきかわふるさと塾」<sup>3,4)</sup>は、村の課題発見とその解決を担う人材育成を目的とした勉強会であった。開塾当初は18歳～40代前半で、85名の村民が参加した。30代の青年勤労世代が主なメンバーであった。開塾当初は、1期3年で、1年目は村を知るための勉強（座学）、2年目は村の外を知るための勉強（座学と視察）、3年目は勉強に基づく実践という計画であった。こういった計画の中で、勉強会メンバーから、なるべく早く実践の事業を実施したいという気運が高まった（「塾生の中で毎月集まっている中で、『何か面白いことをやりたい』という声があつて。（C

表2 インタビュー対象者

No.	年月日	コード	性別	年齢（調査時点）	羽越水害の経験	備考
1	2018年10月23日	A氏	男性	30代	なし	
2	2018年10月23日	B氏	男性	50代	なし	
3	2018年10月23日	C氏	男性	70代	あり	祭立ち上げメンバー
4	2018年10月23日	D氏	男性	80代	あり	祭立ち上げメンバー
5	2018年10月24日	E氏	男性	50代	あり	集落区長
6	2018年10月24日	F氏	男性	50代	あり	集落区長
7	2018年10月24日	G氏	男性	70代	あり	集落区長
8	2018年11月8日	H氏	男性	60代	あり	集落区長
9	2018年11月8日	I氏	女性	40代	なし	
10	2018年11月8日	J氏	男性	40代	なし	
11	2018年11月8日	K氏	女性	30代	なし	
12	2018年11月8日	L氏	女性	20代	なし	
13	2018年11月8日	M氏	男性	70代	あり	集落区長
14	2018年11月9日	N氏	男性	20代	なし	
15	2018年12月12日	O氏	男性	60代	あり	祭立ち上げメンバー、おりのの会 OB
16	2018年12月12日	P氏	男性	40代	なし	おりのの会
17	2019年2月9日	Q氏	女性	不明	-	IVUSA 事務局
18	2019年2月9日	R氏	男性	20代	-	IVUSA メンバー
19	2019年2月9日	S氏	男性	20代	-	IVUSA メンバー
20	2019年2月9日	T氏	女性	20代	-	IVUSA メンバー

氏)」。そこで、NHK のど自慢の誘致を行い、関川村をアピールする計画が浮上したが、すでに新潟県内の近隣の地域で実施していたため、同社からその代替案として「ふるさとの文化祭」<sup>4)</sup>という番組製作が提案され、祭の計画立案、準備、当日の様子について密着取材がなされ、NHK 総合テレビにて1時間の全国放送がなされた。発案から実施までは、わずか3ヶ月間であったという。

「ふるさとの文化祭」は、1) 新しく、クリエイティブなもので、自分達で創造したもの、2) イベントだけで次年度は実施しないというものではなく、それ以降継続すること、の2点が条件となっていた。その際、代表になれそうな人物を複数人選んで、彼らを代表とするいくつかのイベント班(第1イベント班、第2イベント班…)をつくり、各班で内容を検討した。

いざ、祭を企画しようとしたが、その構想は難航した。何度か集まって議論していくうちに、「大里峠伝説」と「羽越水害」の2つをテーマにすることになったという。うち、「大里峠伝説」をテーマにすることは、先行して決まっていたという。「大里峠伝説」とは、関川村に伝わる大蛇伝説である。伝説の概略<sup>5)</sup>は、次の通りである:「忠蔵が大蛇を退治して味噌漬けにする。それを食べた妻(おりの)が大蛇になってしまう。数年後、旅の琵琶法師が大里峠で休んでいると、突然現れた女に琵琶を聞かせる。その女は「おりの」で、荒川一帯を氾濫させ自分の住処にすると伝えた。そのとき、おりのは琵琶法師に「他言は無用」という約束をさせた。琵琶法師はそのことを村人に知らせ、そのおかげで大蛇を退治することができたが、代わりに琵琶法師は約束をやぶったために命を落とす。」。なお、我が国では、水害・土砂災害には、大蛇にまつわる伝説がよくあることが知られている(例:広島市安佐南区八木地区の「蛇王池物語」<sup>6)</sup>、長野県内の「蛇抜伝説」<sup>7)</sup>)。これをもとに、イベントを構想しているなかで、大蛇を作成し、パレードをする企画は、最後のアイデアとして出てきたものである(「大蛇のアイデアが)できかかったところに、水害を思い出すとか、そういうのもくっつけていったわけです。(中略)

最初から『水害をあれするために(水害との関連で)大蛇をやろう』となったのではなくて。(D氏)」。

## (2) 初代の大蛇

初代の大蛇は、のちの「おりのの会」の初代会長が発想・設計したものである。当初、大蛇は藁ではない材料でも検討されていた(「大蛇を作るのかとなったけど、大蛇をどうやって作るのかと。ドラム缶でもつないで荒川へ流すかとなったのだけど。(O氏)」。その後、大蛇の素材を藁にすることが決定し、頭部以外の胴体周りの各パーツを、各集落が作成するように計画された(「全部の集落に関わってもらうため、54集落あるから54作って、頭は無理だろうから頭は俺が作らねばならないなと思いながら、それで55体にしてというふうにして図面を引いていったわけですね。2カ月ぐらいかかったかな、作業場に閉じこもって畳作りもしないで夜遅くまで。(O氏)」。設計の段階では、NHKからは「こんなのできっこない、ある村民から「そんなお金にならないことをやっているとな身つふれるから、悪いことは言わないからそんなのやめろ」とも言われたという(O氏)。当初は、この大蛇作成を全集落にお願いすることは難航したという(「それで集落で今度大蛇作りをお願いしても、『そんなの村長が頼みに来なければ駄目』とか言われた。それで村長に頼んで。集落ごとに酒2升を持っていった。2升では駄目だと言われ、それで4升持っていった。(D氏)」。各パーツは、その部位によって大きさが異なることから、その作業量も部位によって異なる。集落によっては、人口が少ないところもあったことから、世帯数が少ない集落から部位を決定していった。20世帯もあるような集落は抽選で部位を決定したという。参考までに、2019年現在の各集落の人口と、各集落が担当するパーツの前円周寸法の対応関係を図3に示す。なお、前円周寸法は平均272.6 cmである。初代大蛇は台座・担ぎ棒など、担ぐための設備はなかった(図4、文献9))。初代大蛇は初年度で破損したために焼却された。

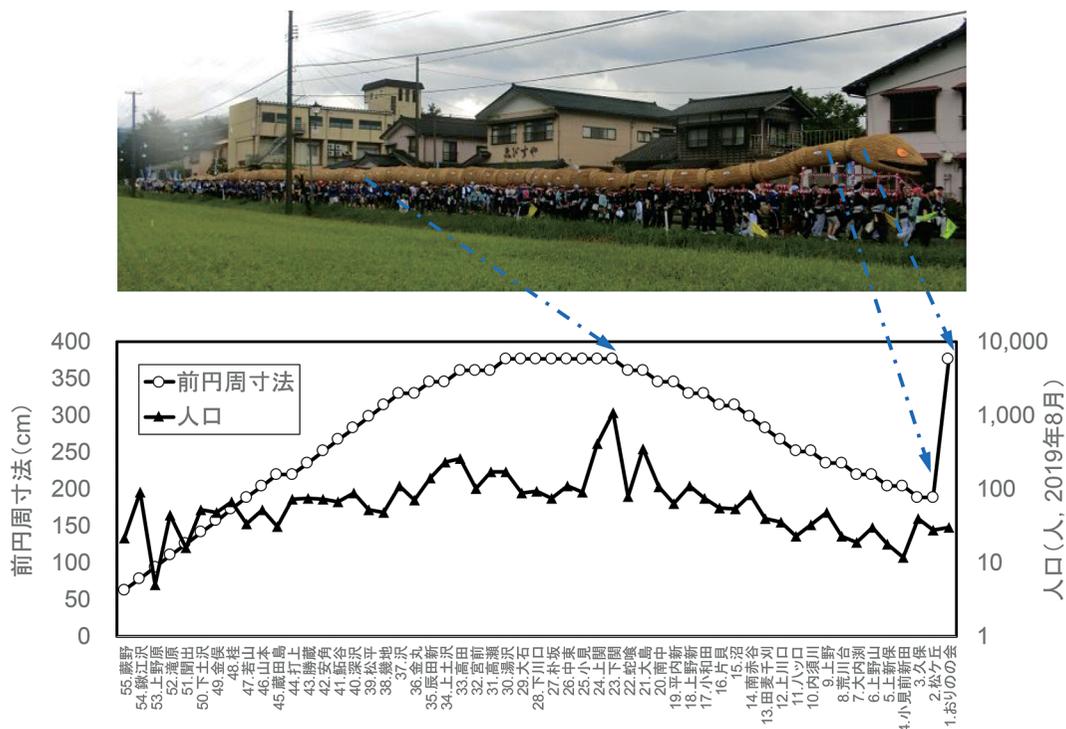


図3 大蛇の各パーツの寸法(寸法データは須貝正春氏提供, 人口は文献8))



図4 初代大蛇(文献9))

### (3) 第1回の「大したもん蛇まつり」

第1回「大したもん蛇まつり」は3日間で、1) 大蛇パレードのほか、2) 喜っ喜大会(きっき: 方言でじゃんけんの意味。1ヶ月半かけて村民7,800人(当時の住民人口)がトーナメント方式で対戦するじゃんけん大会企画)、3) 大名膳の復元(大名行列の米沢藩をもてなした献立を再現)、4) 手作りオーケストラ(村内小学校児童全員に

よる手作り楽器の演奏)、5) 民話劇(野外劇)「大里峠」(沼田曜一氏演出, 村民500名が出演)、6) その他に昔話会, 村発見クイズ, コシヒカリおにぎり5,000個配布, おうち太鼓, 有名歌手による歌謡ショー, 灯籠流し(犠牲者供養), 嫁よこせ運動などが行われた。

第1回目の開催に対する社会の反応は大きかったという(「全国放映が9月5日でした。やったのが8月27, 28日と2日間大蛇パレードです。私も全部担いで歩いた。それで(放映が)終わったらその日のうちに。夕方の放映だったのかな。その日のうちに, みんなの家に電話がかかってきて『おまえら大したことをやった』と(D氏)』)。

### (4) 祭の成り立ちに関する考察

ここまでの結果を踏まえると、「大したもん蛇まつり」の成立した背景・要因は次のようにまとめられる。

1) 祭の開催は, 災害伝承ではなく, 人材育成が

大きな目的であった：「羽越水害ありき」で祭  
が計画されていったわけではなく、新しく、地  
域が活性化し、その中でリーダーが育つことを  
意図して祭が成立した（「最初から水害鎮魂の  
ための発想に蛇を担ごうというのではなくて。  
最後にだんだん、それを水害に結び付けて。で  
もそれをあまり打ち出すと、今の大蛇の人気の  
なくなるので。（D氏）」、「もともと祭をやる  
と思ったのではなく、村のリーダーをつくる  
塾をやるということではじめたのですよ。（C  
氏）」

2) 大蛇は「大里峠伝説」における「大蛇」と「羽  
越水害」における「河川氾濫」を象徴している：  
我が国では、水害・土石流を大蛇のしわざとし  
て考える地域がある<sup>10)</sup>。それを退治する大里峠  
伝説は、水害の象徴としての大蛇を退治するさ  
まが、羽越水害の犠牲者を供養するという位置  
付けと整合していたことから、祭の形態として  
採用されたと考えられる。

3) NHK からの提案を契機にした：NHK からふ  
るさと文化祭の番組企画の提案が、この祭を計  
画する契機になっている。「中には『NHK に振  
り回されたようだ』と言う人もいるのですけれ  
ど、そうではなくて、われわれは『一つ NHK  
を利用して村の元気のために活用しよう』と  
考えたのです。（C氏）」、「『言葉は悪いけど、  
NHK さんを利用してもらって、何か一つ、  
村の祭か何かを残したい』と言った。（O氏）」。

#### 4.2 どのようにして継続しているのか（継続 できているのか）

以下は、祭の初回開催以降から現在までについ  
て得られた情報をまとめたものである。この過程  
をもとに、どのようにして継続しているのかにつ  
いて考察を行う。

##### (1) 第2回から

全国放送後は、村内外から反響があった一方で、  
開催に至るまでの負担が大きかったために、継続  
について村民・集落からの同意には懸念があった。  
2回目の実施について、村役場とふるさと塾の関



図5 ふるさと東京まつりでの大蛇パレード  
(文献11)

係者で54集落に改めて挨拶まわりに行ったと  
ころ、同意・賛同してくれたという（「朝とか夜とか、  
その勤務時間ではないときに2人でそろって『今  
年もよろしくお願いします』と、みんな歩きまし  
た。54集落。反対する区長は一人もいなかったで  
す。それで全部に頭を下げて回ったらみんなは『は  
い、分かりました』と。今でも大蛇を作ってもらっ  
ています。（C氏）」。

2回目から、新たな試みとして村外に大蛇パ  
レードを出張することによって、村民の機運を高  
めていたという（『今年もどうしてもやってくれ』  
と。『その代わり今度は全員東京へ連れて行って  
やる』と。そうしたらみんなが張り切ったのです。  
（D氏）」。1989年10月は、東京都が関川村の申し  
出を受け入れ、「ふるさと東京まつり（東京都立川  
市多摩）」で、4両編成の臨時列車を確保し、村  
民429名で参加している（図5）。その流れで、第  
2回、第3回とつづいていったという。そのほか、  
新潟県内、埼玉県、福島県などにも遠征している  
（表1）。

##### (2) 「おりの会」設立

「おりの会」は、1) 大蛇の作成指導、2) 大  
蛇の作成代行、3) 大蛇の運搬・組み立て、4)  
大蛇パレードの誘導（当日）、5) 大蛇のメンテナ  
ンス、を行う組織である。もともとは、第1回開  
催時のパレードを誘導する「大蛇班」（第1イベ  
ント班）が、今後の大蛇作成や技術指導を念頭に

において、「おりのの会」として結成された(1992年)。初期メンバーは12名で、その後15～16名で構成されたという。なお、初期メンバーは、会長とともに2008年に引退し、次世代が会のメンバーとなっている。大蛇の頭部作成のみ、現在も初代会長が担当している。2018年時点では30名ほどで、祭に関心のある人が参加したり、既存メンバーが勧誘するなどメンバーとなり、また、村外住民もメンバーの中にいる(例:新潟県村上市、聖籠町など)。

以下、1)大蛇の作成指導について述べる。「おりのの会」の初代会長(晝屋)が、大蛇の設計を行い、その図面を各集落に渡して、大蛇のパーツづくりが行われている。また、集落で不幸事があると、その年、その集落では大蛇を作成しない。そのような場合は、おりのの会が該当するパーツの作成を代行する。これは、「おりのの会」メンバー自身の大蛇作成技術の継承の位置付けもある。「『いやー、今年、祭できないんさ』と。そういうときは、『ああ、いいですよ』という感じで、おりのの会に作らせていました。というのは、おりのの会も、どっちみち技術的に勉強しなければいけないのですよ。(O氏)」。祭当日は、大蛇の先頭で指揮棒をふるい、誘導や休憩の指揮をとったり、大蛇周辺で担ぎ手や見物客の安全管理を行っている(「あまりうねり始めると、前に引っ張らせるのですよ。(中略)お客さんがいっぱいいる所は喜んでくれるようにしたりはします。(P氏)」。先頭には、会長と指揮棒係、頭部は両側に3人ずつ配置し、大蛇パーツの5つおきに会メンバーを配置する。大蛇両側につくメンバーは、担ぎ手や見物客が大蛇と電信柱等の障害物に挟まれないように管理を行う。祭の後は、大蛇のメンテナンスを行う。雨にあたった場合は傷むので乾燥させたり、補修を行う。おりのの会は「来る者拒まず去る者追わず」の方針で、決して敷居の高いグループではない(「どうしても先輩面してやかましく言うのではないですが(中略)俺はやはりもう下に任せて、育ってくれと。あとは何かあったら俺が責任を持つからという感じで。(中略)大したもん蛇が楽しくて面白いからといって勝手に(新しい仲間を)誘ってくるやつらもいるし。

あっち(村外)で住んでいるやつらも向こうのやつらを連れてきて。で、一回入らせて、次の年に来なければ来ないし、来るのだったらもう入ってしまうし。そんな感じです。(P氏)。

### (3) 大蛇の更新

大蛇は竹と藁が材料であるため、使用する度に劣化する。そのために、第1回から2019年までに初代～9代目まで製作・更新がなされている。なお、この大蛇は、頭部を「おりのの会」が、それ以外の54のパーツを54の集落がそれぞれ作成する。この「おりのの会」は、大蛇の補修作業や大蛇作りにおける各集落での指導を行う会である。集落で大蛇を製作している様子を図6に示す。

時期は、雪が降ってから、つまり農作業が落ち着いてから、言い換えれば、そのような時期でなければ作業はできない。パーツは4月(5月連休の前、農作業に入る前)に納めることになっている。材料である竹の採取は、水分を含んでいない11月に行われる。現在、材料の切り出しは村内の自然環境管理公社に委託している。1月中旬に、安角ふれあい自然の家(旧安角小学校)の体育館(廃校)に、集落ごとにパーツを分けて配置し、説明会を実施する。大蛇作成に際しては、大蛇製作ガイド(図7)も配布される。

集落によって作成の様子は様々である。B氏の集落では、最初は土日で集まり、その後は平日の日中に集まって作成する。平日であることから、



図6 大蛇作成の様子(須貝正春氏提供)

日中働きに出ていない高齢者が中心になるとい  
う。「うちの集落は今のところうまく前からやっ  
ている人がまだいて、作業を指示してくれたりし  
ているので。5～8年に1回くらいずつつくと、  
前につくったのがどういふふうにつくったかと分

からなくなる。『あのときどうしたっけ』とぎりぎ  
り思い出せるかなぐらいですかね。(B氏)」。E  
氏の集落では、約1週間集中して、午後から作業  
するという。前回作成した人と、今回はじめての  
人が参加し、技術を継承していく。毎日の作業の

グループおりの作成

## 平成29年度大蛇製作ガイド

### 大蛇作りに必要な道具

ノコギリ・鉋・ペンチ・ハサミ・カッター・スケール・マジック・軍手  
製作ガイド書・材料表・基準用ものさし・ロープ通し用カギ(針金で作っても良い)

### 1 作業前に

材料が整っているか材料表で確かめる  
細竹が110センチか確かめて長いものがあれば切ってそろえる  
タガ用の竹の長さを調べて必要な長さに切り、根元の部分が厚ければ削っておく  
(円周の長さより20センチ程長く切る)材料表参考  
ワラをすくって扱いやすい様に準備しておく

### 2

前回までは3重で作っていましたが、今回は4重にしたタガを前・中・後と3部分作ります。  
前・中・後の外側用の竹を選び、それぞれの寸法に印を付けて輪を作り、針金で縛る。  
輪の中に繋ぎ目を上・下・右・左とずらして輪に入れて針金で縛り、4重にした丸い輪を3組  
作る。針金の末端は怪我しない様に処理しておく。

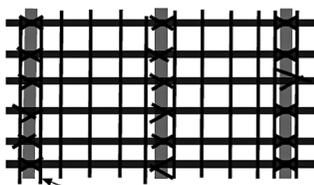


← 4重に作って下さい ※ ケガをしないように注意  
※小さいタガを作る場合は濡らした新聞紙を巻き、その上にアルミホイルを巻いて火で熟して曲げると曲げやすい

1

### 3 骨組み作り

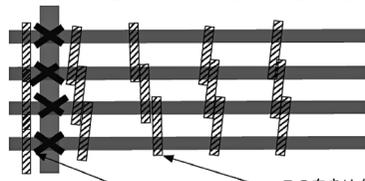
基準用に作った物差しで細竹とタガに印をつけます。  
3組のタガを並べて8本程の細竹を使って円に8等分して細竹をテープでしっかり仮固定する。  
●この時にタガにねじれがあると仕上がりに影響するのでねじれないように必ず直すこと。  
ロープでタガに細竹を間隔を決めながら動かない様に固定して竹の筒に仕上げる。  
※すべての細竹をテープで固定しても良いが、テープはあくまで仮止め用です。  
必ずロープで固定して下さい。



タガの外と内側にロープ

筒ができたら印を付けた細竹の位置にロープを同じ方向に巻きながら一周して結ぶ。  
※前後のタガの外側と内側に必ずロープを入れること。ロープの間隔が狭くとも良い。

竹にロープを同方向に一巻きしながら一周して縛る



タガの端から細竹が4センチ外に出る

この向きはダメです

### 4 筒に六角模様に編みながらワラをつける

ロープを適当な長さ(1m50cm～2m)に切っておく  
どの位置からでも良いのですが細竹と細竹の間に半分程のワラをつけながら六角形の編み目を作ります。隙間なく仕上げるには半分より広くして少し重なる様に付けると良い。適量を足しながら、薄く隙間無くつける。ロープは進行方向から戻す様にカギ等で通して捻りながら進む。ロープの締め方で六角形の形が決まります。端まで進んだらワラを折り返して上にワラを足して下さい。  
●下のロープに上ロープが重ならないと六角にはなりません。(次のページへ)

2

図7 大蛇製作ガイド(須貝正春氏提供)

後は、そのまま宴席になり、参加者間のコミュニケーションを図っている。

また、集落によっては夜に作業するところもある。なお、実行委員会から資機材等の経費が支弁される。F氏は、職場を退職して初めて大蛇作りに参加できたという（「やはり初めて作られたのは、今まで仕事していたから参加できなかったということですね。70歳の方もいましたし、60代がほとんどでしたね。6人ぐらいで作りましたね。（F氏）」）。F氏の集落では、F氏が参加するまで大蛇作りに携わっていた人達が体調の事情から、もう作れないということで、新しい後継者を募り、今まで作ったことのない人達で「おりの会」の指導を受けながら、約1ヶ月かかったという。

各集落では、作り方について「おりの会」から指導を受けたい場合は、村役場に連絡がいき、その後、担当者を調整する段取りになっている。

#### (4) 祭の変遷

「大したもん蛇まつり」は、初回から現在までに、大蛇パレードのコースや、内容が変化しつづけている。

第1回における大蛇パレードは、2日間で周遊する17 kmのコースであった。第2回は「『俺たちに大蛇を作らせておいて、うちの集落に来ないのはけしからん』と言われて（C氏）」などの意見を受けて、2日間で村全体を周遊する28 kmコースになった。2019年最新のコースは、半日間で約6 kmとなっており、2000年代に入って立ち寄り場所が以下のように変化している。

- ～2003年：高瀬温泉－道の駅・関川「ゆ～む」－関川村役場（国重要文化財・渡邊邸）－消防署関川分署－下関集落－大蔵神社－関川村役場（国重要文化財・渡邊邸）
- 2004～2005年：垂水の里（特別養護老人ホーム、湯沢）－高瀬温泉－温泉橋－道の駅・関川「ゆ～む」－関川村役場（国重要文化財・渡邊邸）－消防署関川分署－下関集落－大蔵神社－関川村役場（国重要文化財・渡邊邸）
- 2006年～2017年：垂水の里（特別養護老人ホーム、湯沢）－高瀬温泉－温泉橋－道の駅・関川

「ゆ～む」－関川村役場（国重要文化財・渡邊邸）  
－下関集落－大蔵神社－下関営業所バス停－関川村役場（国重要文化財・渡邊邸）

- 2018年以降：垂水の里（特別養護老人ホーム、湯沢）－高瀬温泉－温泉橋－道の駅・関川「ゆ～む」－関川村役場（国重要文化財・渡邊邸）  
－下関集落－大蔵神社－道の駅・関川「ゆ～む」

表3に、第10回目以降の祭の内容の変遷を示す。表3を見ると、1)一貫して継続して実施されているもの、2)もともと継続して実施していたが、現在は実施していないもの、3)新たに追加で、それ以後継続して実施されているもの、4)一時的に実施したものの、4種類に大別できる。

1)は大蛇パレードのほか、安全祈願祭、火花大会、盆踊り大会、福まきなど、他の祭でも見られるようなプログラムが該当する。安全祈願祭は、第30回までは大蔵神社で祭の安全祈願祭を実施していた。大蔵神社は、大里峠の伝説に登場する琵琶法師が所持していた琵琶が祀られている神社である。なお、大蔵神社がある集落とは別に、「おりのの碑」がある蛇喰集落でも安全祈願祭を実施している。祭のスリム化を図るために、第31回からは、蛇喰集落の「おりのの碑」前で安全祈願祭のみとなった（「2回も安全祈願祭は要らないのではないか」という話になって、だから大蔵神社は終わってからのおはらいにしてもらって。（P氏）」）。このように、一貫して継続しているものの中にも、形態を変えてスリム化を図るような動きが見られる。

2)は、羽越水害水難者供養祭と灯籠流しが該当する。供養祭は、第30回までは祭の前に、湯沢集落にある湯沢観音公園で羽越水害の犠牲者追悼の「供養祭」が実施されていた。湯沢観音公園には、水害犠牲者の慰霊碑が建立されている（図8）。供養祭が実施されなくなった背景には、参加する遺族が高齢化したり、村外に居住しているなどの現状があり、第31回以降は実施されていない（「もうみんな高齢になっていなくなったし、亡くなった人たちの遺族の人たちがみんな遠くにいて、逆に帰ってくるのが大変だということで、結局、終わったのですけど。（P氏）」）。インタビューから

表3 「大したもん蛇まつり」の内容の変遷

年	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回	第16回	第17回	第18回	第19回	第20回	第21回	第22回	第23回	第24回	第25回	第26回	第27回	第28回	第29回	第30回	第31回	第32回
大蛇パレード	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
安全祈願祭	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
羽越水亭水難者供養祭	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
花火大会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大盆踊り大会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
灯籠流し	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
福まき	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
みこしコンテスト(みこしパレード)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
喜ツ喜大会	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
降雨体験装置の設置																							
昇天竜(さいたま市)																							
よさこいソーラン																							
龍泉太鼓																							
小大蛇パレード																							
ミニ大蛇パレード																							
ウォークロスハンティング抽選会																							
大蛇嫁入セレモニー																							
中学生による「大里峠伝説」紙芝居																							



図8 湯沢観音公園にある羽越水害犠牲者の慰霊碑(著者撮影)

は「私は役場に入って初めて知ったのが、湯沢の観音公園に慰霊碑があるのです。(中略)そういうこと・所(観音公園で供養祭があるということ、観音公園があること)があるのだというのは(役場に入って)初めて知りました。(J氏)」と、遺族以外や若い世代には、供養祭やその場所は、あまり認知されていないようである。犠牲者の冥福を祈る目的で実施されていた灯籠流しも、同様な理由で2011年を最後に現在は実施されていない。供養祭と灯籠流しが実施されなくなった影響については後述する(4章3節(2))。

3)には、よさこいソーラン、龍泉太鼓、小大蛇パレード・ミニ大蛇パレード、紙芝居などが該当する。安全祈願祭後に蛇喰集落で行う集落周辺の子どもが主に参加するミニパレードと、大蛇パレード本番当日に祭に参加するすべての子どもを対象にするミニパレードがある。また、2018年以降は小学生が「大里峠伝説」の紙芝居を作成し、披露するプログラムもある。

4)は、主に第20回、第30回のように節目となる回で、限定的に実施するプログラムもある。

(5) 担ぎ手の獲得

大蛇の担ぎ手は、村民として、1)集落(行政区)からの代表、2)中学生、3)それ以外の村民、村外から4)IVUSA(後述)、5)それ以外に分けられる。図9に大蛇の担ぎ手の人数の経年変化を示す。図9を見ると、2011年以降は400名以

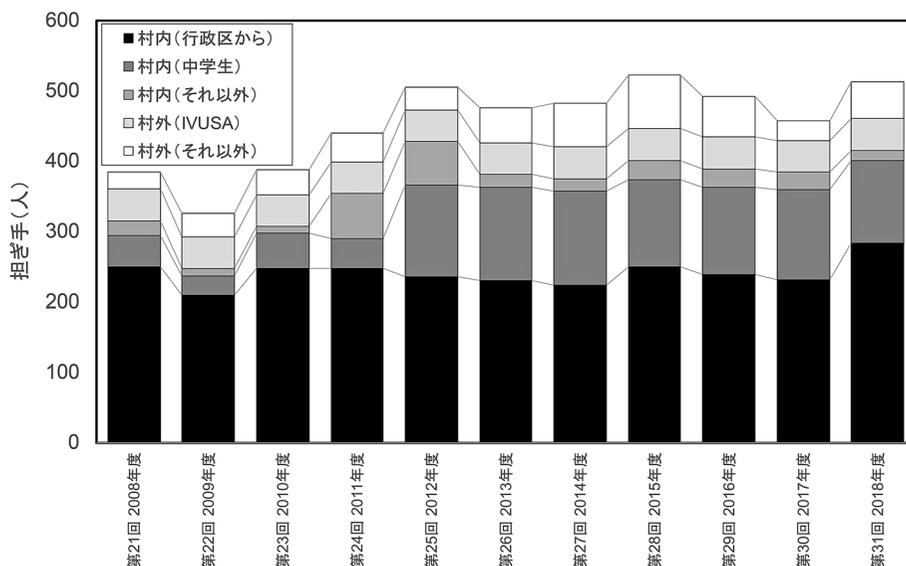


図9 大蛇の担ぎ手人数の変遷

上を経年的に獲得できていることが分かる。なお、2012年第25回からは、祭開催日は関川中学校(村で1校)の登校日として位置づけられ、中学校の全生徒が参加することになり、以降の担ぎ手は中学生分が増えている(図9)。関川中学校の生徒数は2010年から2018年にかけて、202名から129名と減少傾向にあることを付記しておく(ただし、2016年は127名、2017年は128名と3年間は横ばい)。

1)については、各集落で事情がまちまちである。なかには、担ぎ手を出すことができない集落も存在する。E氏の集落では8名(20~40代)で、担ぎ手には集落を代表して担いでくれたということで謝礼を出す(「本当であれば自主的に出るのが一番いいのかもしれませんが、なかなか人集めが容易でないこともあって、本当に好きで好きで担ぎたいという人もいるのですけど、やはり人数を確保して、お礼の意味ということなので(E氏)」。G氏の集落では、毎年約20名(20~70代)が担ぎ手として参加している。祭直前の8月中旬に集落の祭があり、その実行委員メンバーが主な担ぎ手になることで、担ぎ手の確保を維持している。J氏の集落では、ここ10年ほど若い世代が毎年10~

15名(20~40代)が担ぎ手として参加している。K氏の集落では、担ぎ手の成り手が多い。婿や村外からの移住者が多く、30~40代の男性のコミュニティが良好であるという。2)の中学生が参加した頃から、盛り上がってきたという。

#### (6) 学生ボランティア団体の存在

上記4)のIVUSAについて述べる。IVUSA(International Volunteer University Student Association, NPO法人国際ボランティア学生協会)は、全国の約90大学・4,000人の学生が、「国際協力」「環境保護」「地域活性化」「災害救援」「子どもの教育支援」の5つの分野を軸に活動をしている団体である<sup>12)</sup>。「大したもん蛇まつり」については、このうち「地域活性化」の分野における活動となる。

IVUSAが祭に関わるきっかけには、IVUSAに関川村出身者がいたことが関係している。IVUSAは2004年より祭の支援を行っている。2004年8月上旬当時、関川村出身のメンバーを1名含む2名で関川村を訪れ、大蛇の担ぎ手を希望する申し出があった。その希望を村は受け入れたところ、同年の祭では47名のメンバーが村を訪れた(対象者

によっては、10~20名という発言もある)。その後、IVUSAは、継続的に祭を支援するようになり、現在は150~200名のメンバーが毎年参加している。その後、関川村とIVUSAは、2014年8月に相互に連携し地域社会の発展に寄与していくことを目的とした「地域連携協定」を締結し、毎年2月に村内で開催される「おいしい どもんこ祭(かまくら(どもんこ)作りほか雪遊びのイベント)」と「七ヶ谷雪はたる(雪像・雪灯籠のイベント)」も2015年から支援するようになる。前者は150名、後者は100名ほどのメンバーが参加している。

また、その最初の受け入れがスムーズに行われた背景には、村側がボランティアという活動の趣旨を受容できたことも関係している。インタビューからは、「(祭前日に)『何かやることはないか』と聞かれ、1ヶ月前の豪雨で荒れていた河川敷の泥や石の清掃をお願いした。(当時、いまちボランティアというものは、よく分からなかったが)、前の日に花火を一緒に見たりしている間に、私はボランティアというのを初めてそのとき理解した。(D氏)」という発言が得られている。

なお、IVUSAが関川村に入るときには「到着セレモニー」が、祭が終わり村を出るときには「出発セレモニー」がある。前者では、参加学生達が「ただ今戻ってまいりました」と言うことに合わせて、村長は「お帰りなさい」と言って迎える。逆に後者では、学生達は「行ってまいります」と言い、村長は「行ってらっしゃい」と返す儀式になっている。IVUSAでは、他の地域においても地域活性化活動を行っているが、このようなセレモニーがあるところは、関川村だけであるという(「結構特殊で、数ある活動、地域活性化の活動は多いのですが、もっと長いところもありますし。ただ、そういった受け入れ側が地域ぐるみで正式に『お帰りなさい』『行ってらっしゃい』があるというのはないと思いますね。(Q氏)」)。

なお、IVUSAのOB・OGも「大したもん蛇まつり」に参加している。宿泊するOB・OGの場合は、宿ではなく、民家に泊まり、交流を深めることもあるという。『卒業しても関川に帰ってこいよ』と言ってくださる方とかもいるから、遊び

に行きたいなど。本当は住むのが一番いいと思うてはいるのですが、難しいところもあって、だから遊びに行って、会いに行きたいなどは、関川に対しては思っていますね。リピーターになって来続けた子だと、多分、半数以上は帰ってきていますね。実は将来の『お客さん』を獲得していることになるかも。(Q氏)」。

また、IVUSAのメンバーには、この活動を経ることで関川村を第二の故郷として意識する者の多い(「何か、行く先、行く先で差し入れとかを頂いて、そうやって何か食べながら一緒にただ話しているだけというので、でもこれが一つのボランティアの形でもあるという話をされていて、これは面白いなと思ったのがすごく大きくて、こんなことでも自分にできることがあるのだと思ったのもそうですし。当時の活動のリーダーに『ここが私の第二の故郷だ。みんなもそういうふうに思っしてほしい』ということと言われ続けて。そこまで言える関係性と、そこまで言える思いって何なのだろうと思ったのがすごく強くて、帰り続けてきて、やはり4年目になって今こうして考え直したときに、何か一つつながりというか、彼も言った温かさも含めて、『あ、第二の故郷ってこういう感覚なんだな』というのをすごく感じますし、だからこそ、やはりまた行こう、また帰ろうと思えるというのがすごく強いですね。(S氏)」、「年中心配して『就職活動はどうだ』と電話や手紙をくれる村の方がいたり『泊まりに来いよ』とか、『夏はどうなのだ』などという話をしてくれる村の方がいたり、私がお家に帰ってくると、すごくうれしいと喜んでくれる村の方がいて、そういうことに『自分もこういうことができるのか。うれしいな』という気持ちがあって帰ってくるのが一つの理由です。(T氏)」。

#### (7) 継続できている要因に関する意見

インタビュー調査からは、祭が継続的に開催できている要因と考えられる意見が対象者から、次のような内容で得られている。

- 1) 祭そのものが好きである：対象者の中には、祭自体が好きであるから、継続できているとい

う意見があった（「まあ、好きですからね、そういうこと（祭）が。（G氏）」、「やはり、こういう祭とかが好きだからね。こうして盛り上げていくためには、誰かしら馬鹿にならないとできない（笑）。（M氏）」）。

2) 周囲が注目しているものであり、村民の中に祭に対する誇りがある：世間的にも有名な祭となっており、そもそもやめるという発想がない。また、若い人も含めて村民が祭を自分達の誇りに感じているという（「もうやめられなくなったのです。『大したもん蛇まつり』というのは関川村だったのですか」と言われるようになり、嫌でも続けていかなければならないなのというのがあります。（C氏）」、「だんだん回数を重ねるにつれて、皆さん誇りがあると思うのです。大したもん蛇まつりは、あれだけ注目されて、全国的にも有名で。中には『よっしゃ、やるぞ』というよりは『またきたか、やってやるか』みたいな感じかもしれませんが、でも、やはりそういう自負はあると思います。（一般的には）なかなか今の若い人はそういうのが面倒くさいとかありますよね。行くのが嫌だとか。だけど、大したもん蛇は若い人もすごい多いのです。だから、若い人が行きたいと思う祭なので続いているのではないかなと思います。多分、若い人も誇りがあると思います。（J氏）」、「まず30年間もやっていますので、浸透している祭でありますし、多分、やめるっていうのはなかなかないと思う。（N氏）」）。

3) 村の人材を育てることが主な目的である：これは、「せきかわふるさと塾」の設立、それに伴う初回の「大したもん蛇まつり」の開催のときに存在していた祭開催の本来の目的であり、現在でも運営関係者にはその思想が根付いている（「祭は何のためにするの、と一番最初に考えたときに、やはり私の場合、あの当時だから若かったし、若い人たちの人材育成に役立てたいというのが、まず一つだったのですね。（O氏）」、「実際、やはりどうしても先輩面してやかましく言うではないですか。それも悪いとは言わないけれども、全員が全員先輩の言うことを聞くわけ

ではないから、俺はやはりもう下に任せて、育ててくれと。あとは何かあったら俺が責任を持つからという感じで。（P氏）」）。実際にイベント班や、おりのの会に携わった経験をもった人材が、別の場面において村内で活躍しており、リーダーを輩出している旨の発言も得られている（「それから村内各団体随所、随所で、そのとき関わった人たちも議会の議長であったり、体育協会の会長であったり、さまざまところにも張り巡らされています。（C氏）」、「（おりのの会のメンバーになっている人の中には）消防団とか何とか（の役割になっていて）。別のお祭りにも関わっているのですよ。（P氏）」）

4) 地方だからこそ、住民の力を結集できる：都市部ではない、住民の様子が互いに分かるぐらいのコミュニティだからこそ、多数の住民が関わり、継続できているという意見である（「何でもそうですが、つくるのはそのときの勢いで結構できるのです。けれども継続するというのは、波もあって、関わる人の意識も変化して。長く続けるのは何でも大変です。1人や2人の気持ちではないです。みんながカバーしないとできないので。私はつくるところを中心になってやりましたけれども、継続してきたのはやはり村民みんなの力だというふうに思っていますね。何でもそうですけれど、少数の人たちが頑張っても継続なんてできません。（C氏）」、「田舎だからできるのです。これが、自治会などがある市町村だったら、それぞれがいろいろな考え方をしているから、まとまらない。でも田舎の集落は、常に隣の空気をお互いに見ているのですよね。だから『隣の集落はどうだ?』『いや、大蛇を作り始めたよ』『えっ、それなら、俺もやらねばならないのではないか』と。そういうところが田舎にはあるのです。（O氏）」）。

5) 参加を強制しない・無理をしない：祭そのものを強制ではなく、できる人が、やりたい人が無理のないかたちで実施していることが、継続的できているポイントであるという（「どんな良いことでも強制したら悪くなる。あくまでも、お願いするのはいいけど『絶対に作れ』みたい

な言い方は絶対駄目だと。だから、駄目なときは『分かりました』と言って『おりのの会』で作れと。それで『もし次に作るときに協力できそうだったらお願いします』と言うのが大事だぞと。やはり何でもそうですけど、みんなに無理やりやらせて、やりたくない人にもやらせて、ああでもない、こうでもないいろいろな文句が出てくるところがあるのですね。確かに方向的には良いことだから、その方向はいいのだけど、人というのは、それぞれ個人個人いろいろな考えがあるので、無理やりは良くないよと。(O氏)、「3回目ぐらいのときかな、なんぼお願いしても作ってくれない集落があって。でも、その集落が、その後で作るときに、一番に申し込んできてくれたのですね。『こんなことがあったのですわ。男衆が決めてあれした(作らないと決めた)けど、おなご衆がその後、怒ってね。うちは孫を連れたりして祭を見に行くのを楽しみにしていたのに、うちの集落の大蛇がないなんて、いがんなんねえがね(祭を見に行けない)。おまえさん方、男衆ができないのだったら、私らおなご衆が作ったのに何で断った!』と。私がいつも思っていたのは、祭というのは、あまり強制してはいけないと。(O氏)」。

### (8) 祭の継続に関する考察

ここまでの結果を踏まえると、「大したもん蛇まつり」が30年以上継続できている背景・要因、言い換えれば、継承するためのしかけは次のようにまとめられる。以下のかつこの中の数字は、把握した実態や得られた意見を記述した箇所となった本節の項番号や箇条書きの番号である。

1) 「こわれるもの」「くちるもの」を媒体にする((2), (3))：大蛇の素材に藁を採用しているために躯体が劣化することから、これを更新する機会が訪れ、それを契機にした技術継承と住民間コミュニケーションを発生する((3))。これは伊勢神宮の式年遷宮と同じ仕組みである<sup>13,14)</sup>。また、関川村の場合は、それを維持するための組織機能として「おりのの会」を設置していることの効果が大きい((2))。

2) 人材育成を念頭におく((5), (7)の1), (7)の3))：祭そのものの開催やそれを楽しむことはもちろんのこと((7)の1), 地域のリーダーを育成するという長期的な視野に立ち、大蛇の担ぎ手というプレイヤーとしての立場だけでなく((5)), 祭の企画・運営を担う機会をつくることにより、人材育成を主眼にしている点((7)の3))は、祭の開催というプロジェクトを継続する上で重要なモチベーションになっている。

3) 強制をしない・無理をしないようになるべく多くの住民が関われるようにする((4), (7)の5))：各集落での大蛇の作成については、困難な場合は「おりのの会」がサポートまたはバックアップの機能を有する((7)の5))。また、大蛇パレードのコース変遷や、祭の内容の変遷に見るようように、人口規模や時代に合わせて柔軟に変化させたり、スリム化している((4))ことも継続できている要因である。

4) 外部資源を積極的に活用する((2), (6))：おりのの会では村外の人材((2)), 担ぎ手ほかの担い手として IVUSA を受け入れていること((6))が、これに該当する。特に IVUSA については、将来的な祭の顧客を獲得することにもつながっている((6))。

5) コミュニティを代表する「誇り」となる((1), (7)の2))：村外に大蛇パレードを遠征することで、対外的にも着目が集まるだけでなく((1)), 各受賞によって(表1)その活動が世間的に評価されるようになった。村の外に紹介できる、村の誇りになったこと(7)の2))で、「やめれなくなった」ことも継続できている要因と考えられる。

6) 地方だからこそできる(都市部では難しい)((7)の4))：顔が見える関係があることで、共同できる素地があることはもちろんのこと、隣の集落の状況(空気)を見ながら、自分の集落だけがやめるといふ状況になりにくい(やめられない・やめにくい)((7)の4))ことも継続の背景にある。

なお、大蛇の頭部の作成(更新)は初代会長の

みが行っており、この点は継続性の課題となっている（執筆時点）。

### 4.3 災害伝承の機能を有しているか

「大したもん蛇まつり」が、羽越水害を伝承する媒体として機能しているか否かに関する意見・印象については二分している。

#### (1) 肯定的な意見

以下は、祭が羽越水害を伝承する機能を担っているという趣旨の発言である。羽越水害を直接体験したり、祭の立ち上げに関わった対象者から肯定的な意見が得られている。一方で、祭そのものが直接的に伝承しているわけではなく、子どもに対する学校教育の中で、祭の由来を学習すること、言い換えれば、学校教育を媒介として「大したもん蛇まつり」が羽越水害に由来すること、それを伝承するねらいがあることを知ることに繋がっているという実態が、若い世代の発言から得られている：（「『大蛇を担ごう』。それからもう一つは、『水害で流された人の灯籠流しをやるう』と。犠牲者を慰めようとかね。（D氏）」、「大したもん蛇とか近づいてきたり、あと、そういう羽越水害何周年なんていうのがあります。（E氏）」、「私が5年生のときに大したもん蛇まつりの1回目が始まったので、そのときには昭和42年の水害をもとにこの祭をするのだよということで、学校で話を聞いたと思うので、そのときに初めて昭和42年発生だというのは分かったのだと思うのですよね。（I氏）」、「今は、学校教育の中で、大したもん蛇まつりがあるから、羽越水害のことも絡めて伝えられている感じはありますよね。（I氏）」、「今、うちの上の子どもは中学1年生になりましたけど、中学生が必ず学校行事で大したもん蛇パレードに参加するのです。そうすると、大したもん蛇まつりの担ぎ方もそうなのですが、大したもん蛇まつりはどのようにして生まれたかとか、きっかけとか、そういう水害との関わりだとかも全部、学校で説明してから参加してもらっているので、今の子どもたちは多分、僕たちが子どものときよりも、水害も関わっているのだという知識

は多少あると思いますね。（I氏,）」、「大里峠よりも、羽越水害のイメージが多分強いかと（N氏）」。

以上のように、中学生が大蛇を担ぐに当たって、祭の由来・位置づけを全生徒が学習する機会がある。また、2018年第31回より、中学生による観光客向けの大里峠の紙芝居が始まり、公演するに当たっての事前学習も加わった。

#### (2) 否定的な意見

以下は、祭が羽越水害を伝承する機能を担っていないという趣旨の発言である。祭の中には、羽越水害のを感じ取られていない人がいることが分かる。その中には、灯籠流しや供養祭などの犠牲者を追悼するパートが祭からなくなったことが原因と捉える発言である。これらは、羽越水害を体験していない30~40代や外部からの関係者からの意見として見られる：「（祭は）でっかい蛇を見に行くみたいな感じで参加していると思います。（中略）水害があったことをちゃんと伝える役割を持っていないと思う。（中略）どちらかという私はもう大里峠のことばかりで、あまり水害について祭で考えることはないです。灯籠流しがなくなったことが大きいです。（K氏）」、「私が思うに、大蛇伝説の方は、紙芝居とかも含めてすごく関わり深く見られるし、（中略）羽越水害の方はどうも難しいなというのがあるのかなというのは。（Q氏）」、「祭の中で（羽越水害）と言われると、感じられない部分、感じにくい部分はあるなと思います。（S氏）」、「大したもん蛇まつりにては『お祭楽しみだな』みたいな、その程度だったなという感じはします。（I氏,）」、「私は水害と大したもん蛇がつながっているというのは、役場に入ってから知ったのですよね。（J氏）」。

#### (3) 祭の災害伝承機能に関する考察

羽越水害を直接体験していない世代、特に30~40代には羽越水害を伝承する機能を果たしていない傾向が見られる。一方で、調査時点で20代以下の世代には、学校教育を媒介することによって、「大したもん蛇まつり」が羽越水害に由来し、その伝承のねらいが伝わっており、学校教育が災害

伝承に大きな役割を果たしていることが分かる。

## 5. おわりに

本報では、1967年羽越水害に由来する新潟県関川村「たいしたもん蛇まつり」を対象に、インタビュー調査や資料調査にもとづいて、どのようにしてはじまったのか、どのようにして継続できているのか、災害伝承として機能しているのか、を明らかにすることを試みた。その結果は、次のようにまとめられる：

- 1) どのようにしてはじまったか：「大したもん蛇まつり」は、祭を通じた人材、特にリーダーの育成がもともとのモチベーションであり、災害伝承ありきではなかった。また、大蛇をモチーフにしたのは、村に伝わる大里峠伝説では大蛇を退治するというストーリーと、大蛇が水害・土石流の象徴する神であることが、羽越水害の犠牲者を供養するという位置付けと整合していたことが背景にある。
- 2) どのようにして継続できているのか：藁で作る大蛇という、「こわれるもの」「くちるもの」を媒体にすることで、更新の際に世代間をつなぐ役割が果たされている。また、参加に際しては、村民に対しては強制をしないように、また、外部の人材資源を積極的に活用している。加えて、祭の形態をリソースや時代に合わせて変化させていることで30年以上の継続がなされている。
- 3) 災害伝承として機能しているのか：祭単独では、ある世代層には、羽越水害の伝承のねらいは伝わっていない傾向が見られたが、若い世代に対しては、祭の由来を学習する学校教育を媒介することで、伝承の機能が果たされていると考えられる。

以上を踏まえると、効果的で持続的な災害伝承の立案・運営を行う上では、次の点が重要になると考える。

- 1) 災害伝承単独にしないこと：人材育成、地域活性化、観光などを組み合わせることで、災害伝承だけではない目的があることで、相乗的な効果や持続可能性を高めることができる。2004

年新潟県中越地震で被災した旧山古志村木籠集落にある「郷見庵」には、当時の被災の様子や災害を学ぶことだけでなく、地域住民との交流をもとめて再訪者が継続している実態<sup>15)</sup>と整合する。

- 2) 継承・継続するための仕掛けを用意すること：媒体に「こわれるもの」「くちるもの」を採用すること、内部関係者に強制をしないこと・無理をさせないこと、外部資源、特に人材を積極的に受け入れることが重要である。1点目の「こわれる」「くちる」媒体については、大阪市にある「大地震両川口津浪記」で毎年8月に行われる、彫文への墨入れ<sup>16)</sup>、あえて腐る材料として木材で作る大槌町の「木碑」<sup>17)</sup>などの他事例ともねらいが一致している。「これれるもの」「くちるもの」の更新を支える技術継承や企画・運営を行う組織（関川村では「おりのの会」）も必要である。また、4章2節中で述べたように「やめられない・やめにくい」という一定の制約も必要かもしれない。
- 3) 学校教育と連携させること：祭行事単独ではなく、学校教育機能と連携することで、若い世代に直接的に地域教育として実施することが効果的である。

今後の課題は、「大したもん蛇まつり」がもたらす羽越水害の伝承効果と、住民の防災活動への影響について定量的な評価を実施したい。併せて、羽越水害で被災した隣接する地域（新潟県胎内市（旧黒川村）、山形県小国町など）との災害伝承の過程や実態について比較分析を実施したい。

## 謝辞

本研究は、河川基金助成「発災から50年経過した洪水災害の伝承実態に関する研究」（研究代表者：佐藤翔輔）の助成によるものである。インタビュー調査にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。関川村総務政策課観光・地域政策室の皆様、特に大島祐治様には、調査に関する受入れ・調整において多大なる支援をいただいた。また、羽越水害に関する過去資料の収集においては、せきかわ歴史とみちの館の皆様、平田大六氏、佐藤

忠良氏、須貝正春氏から多くをご提供いただいた。インタビュー調査の際には、東北大学大学院・門倉七海氏に同行・支援いただいた。これらの皆様に感謝申し上げる。

### 参考文献

- 1) 羽越水害50周年記念事業(荒川水系)実行委員会：羽越水害から50年，2017.
- 2) 関川村：大したもん蛇まつりって!?, <http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/tourism/209/210/index.html>, 2019年11月5日参照
- 3) 新潟県関川村「せきかわふるさと塾」レポート(東北における人材育成), 東北開発研究, No.73, pp.18-23, 1989.5.
- 4) 佐藤忠良：大したもん蛇まつり, 東北開発研究, No.122, pp.54-55, 2001.10.
- 5) 関川村：大里峠(おおりとうげ), <http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/tourism/209/211/index.html>, 2019年11月5日参照
- 6) いさほうネット：広島安佐南区・八木地区の災害伝説と大正15年(1926)災害, <https://isabou.net/knowhow/colum-rekishi/colum46.asp>, 2019年11月5日参照
- 7) 笹本正治：蛇抜・異人・木霊－歴史災害と伝承－, 岩田書院, 1994.12.
- 8) 関川村：住民登録人口(2019年8月末現在), <http://www.vill.sekikawa.niigata.jp/politics/280/index.html>, 2019年11月5日参照
- 9) 関川村：村民融和のシンボル9代目 大したもん蛇の製作開始, 広報せきかわ, pp.2-3, 2017.2.
- 10) 災害 大災害を呼ぶ大蛇と法螺貝の伝承, ミツカン水の文化センター機関誌「水の文化」, No.53, pp.24-25, 2016.6.
- 11) 関川村役場：関川村発足40周年記念 写真で綴る40年の歩み, 1995.3.
- 12) NPO 法人国際ボランティア学生協会(IVUSA):, [https://www.ivusa.com/?page\\_id=7504](https://www.ivusa.com/?page_id=7504), 2019年11月5日参照
- 13) 風見 明：日本の技術レベルはなぜ高いのか, pp.49-53, PHP文庫, 2002.
- 14) 首藤伸夫：記憶の持続性－災害文化の継承に関連して－, 津波工学研究報告, No.25, pp.175-184, 2008.
- 15) 山崎麻里子・佐藤翔輔・山口壽道・マリ・エリザベス：震災伝承施設に必要な要件の探索的分析－木籠メモリアルパークへの再訪者に対する質的調査をもとに－, 自然災害科学・特別号, Vol.36, pp.41-52, 2017.9.
- 16) 大阪市浪速区：「安政大津波」の碑, <https://www.city.osaka.lg.jp/naniwa/page/0000000848.html>, 2019年11月5日参照
- 17) 吉田優作：災害を後世に伝えるために～木碑プロジェクト～, 地域防災 No.19, pp.36-37, 2018.

(投稿受理：令和元年11月6日  
訂正稿受理：令和2年2月12日)

### 要 旨

1967年羽越水害に由来する新潟県関川村「たいしたもん蛇まつり」を対象に、インタビュー調査や資料調査にもとづいて、どのようにしてはじまったのか、どのようにして継続できているのか、災害伝承として機能しているのか、を明らかにすることを試みた。その結果、1)「大したもん蛇まつり」は、祭を通した人材、特にリーダーの育成がももとのモチベーションであり、災害伝承ありきではなかったこと、2)大蛇をモチーフにしたのは、村に伝わる大里峠伝説では大蛇を退治するというストーリーと、大蛇が水害・土石流の象徴する神であることが、羽越水害の犠牲者を供養するという位置付けと整合していたこと、3)竹と藁で作る大蛇という、「こわれるもの」「くちるもの」を媒体にすることで、更新の際に世代間をつなぐ役割が果たされていること、4)村民に対しては強制をしないように、また、外部の人材資源を積極的に活用していること、5)祭の由来を学習する学校教育を媒介することで、伝承の機能が果たされていること、などが明らかになった。